

都市民俗学はどこへいったのか

Where Have Urban Folklore Studies Gone?

小池淳一

KOIKE Jun'ichi

はじめに

① 民俗学における都市という問い

② 団地と江戸と

③ 世間話と芸能と

④ 都市をどのようにとらえるか

おわりに

【論文要旨】

1970年代から80年代にかけて盛んに論じられた都市民俗学はどのように形成され、どういった可能性と限界とを持っていたのだろうか。本稿はそうした問題について、都市民俗学の模索段階、形成期について検討し、その様相について論述を試みる。さらに都市民俗学を表面的には標榜しなくても、都市をとらえた民俗研究を検討し、その可能性を指摘する。ここでは特に世間話や個人に関する着目が重要であったことを確認する。全体として、都市民俗学は現代社会や民俗変化を対象化するムラを超える民俗学へと民俗研究が発展的に解体する過程と位置づけることができ、そこでの問いや模索された対象や概念化の取り組みは、現代における民俗的諸事象との対峙を志向する研究へと分節化されたといえるのである。

【キーワード】 団地、江戸東京、都鄙連続論、世間話、個人、現代

はじめに—本稿の目的と構成

都市は多くの人びとの移動の軌跡が蓄積されていく空間である。都市の定義はさまざまなものが考えられるが、民俗学的に考究しようとした場合、そうした都市における移動の集積としての生活が課題となるであろう。その際に1970～80年代における、いわゆる都市民俗学の成果は民俗学が村落を意識しつつ相対化を図ったという点で学史的に大きな意味を持っている。本稿はそうした都市民俗学をいくつかの視点からとらえ直して、今後の研究に資する点を確認しようとするものである。

本稿は都市民俗学を総括するというよりも、その当時の基本的な論点を振り返り、今日でも有効な面を論じていきたいと考える。これは大まかに次のような回顧と問題系とを含むことになる。まず、都市を対象に民俗学が成立するのか、都市の民俗研究は可能か、という問いかけである—さらには、そこにはそうした問いの立て方の適否も含まれる—、次に都市民俗学の希求あるいは成立への模索が希望であった時代をどう評価するかという問題がある。それはさらに、実際の都市民俗学の成果がどのようなものであり、またその読み替えや組み替えとしてどのような研究領域があったのか、あり得たのか、という問題にもつながっている。

具体的にはまず、1989年の『都市民俗学へのいざない』[岩本通弥ほか編1989]の刊行前後の検討を行いつつ、都市民俗学の概括を行う。次いで代表的な都市民俗研究として倉石忠彦と宮田登の論考を取り上げ、その特色を考える。さらに都市民俗学と銘打たなくとも実質的には都市民俗の範疇に入る研究を取り上げ、その視野と射程、存立基盤を確認したい。以上を通して、都市民俗学はどこへいったのか、すなわち都市民俗学と現在の民俗研究との関係についての考察を行いたい。ここではいわゆる都市民俗学が、どういった問題意識、研究史把握のもとに胚胎し、実際にはどのような展開を遂げたのかを素描し、それを今後の展望との関連で検討してみたいのである。

①……………民俗学における都市という問い—『都市民俗学へのいざない』まで

日本の民俗研究のなかで「都市民俗学」という用語を初めて用いたのは関敬吾であるとされてきた。大月隆寛『『都市民俗学』の本質的性格』[大月1985]によれば、関敬吾の「民俗学の現代的意義」[関1967]が、「都市民俗学」という語を用いている。これは国際派でしかも理論派とでも言える関の研究姿勢によるものと思われる。関はあるべき民俗学の可能性、領域としてこの語を用いている。

一方で若くして死んだ小島勝治は「都市民俗学」を具体的な研究課題を含むものとして想定していた。小島の短い研究歴のなかで、職人や都市貧困層の研究は、都市民俗学の早い、しかも具体的な実践として注目される[伊藤1985]し、その展開として、早すぎた晩年における統計学への没入も方法的必然として理解することができる⁽¹⁾。しかし、関の提言にしる、それにはるかに先行する小島の実践にしる、継承者はなく、これらは研究の潮流を形成するには至らなかった。いわば孤独な試技にとどまったのである。

都市民俗研究にあたっては、柳田國男の都市への視線を検討することが民俗学における一種の作

法であった。日本の民俗学においては柳田が何をどのように取り上げているかということが新しい問題を取り上げる際の古くからの手順であり、その点では都市研究は新しい方法のもとに始められたものではなかったとも言える。そこで参照され、言及・引用されたのは『都市と農村』（1929年）であり、『明治大正世相篇』（1931年）であった。前者は都市の形成を農村との連続性においてとらえる都鄙連続論⁽²⁾の根源として、後者はそれとともに都市生活者の感覚や近代的な生活あるいは民俗の変容の検討例として機能した。

こうした都市民俗学への模索は、研究動向—研究がふまえるべき諸業績の見渡しとそれに基づく展望—としても上野和男「都市民俗学」[上野 1978] や高桑守史「都市民俗学—その研究動向と課題—」[高桑 1979] に繰り返り広げられている。しかし、ここで主張された対象としての地域・常民概念の全面的な放棄や伝承母体の再定義などは必ずしも十分に受け止められたとは言えない。都市民俗学の研究はこうした概念の錬磨や共通の問題設定よりも具体的個別的な事例研究が先行していった。そこでまず、第一に所与の「都市」とそこから見出される民俗の分析が行われ、第二にその際には記号論・象徴論が援用されることが多い一方で、第三の特徴として、伝統的な研究分野の意識的もしくは無意識の読み替えが試みられていた。

1980年代の最後には都市民俗学を表題に掲げた論文集『都市民俗学へのいざない I・混沌と生成 II・情念と宇宙』[岩本ほか編 1989] が刊行されている。これは 27 編の論考を 2 冊に配し、論者それぞれの立場から都市民俗へ迫ったものである。この論集を後に検討した川村清志は、その特質として、(既成の)民俗学との連続性、現代的事象への関心、前近代からの町・都市についての分析の 3 点を指摘する。都市民俗学は過渡的な形式もしくは主張であったと位置づけるのである [川村 2009: 65-66]。

筆者はこの論集に対して、研究史との対峙が微弱であることに加えて、都市の読み替えである現代社会という枠組みへの顧慮が不足しており、また民俗学的方法的優位が打ち出せるであろう個人に視点を据えた生活実感の捕捉にも成功していないという批判を行ったことがある [小池 1989a]。ここではさらに民俗を取り上げる思想史的な自覚が不足しているとも述べた。民俗事象を通じて生活や都市を論じることは、研究のなかで全く疑う余地のない、自明のことではなく、歴史哲学に類するような、なぜ民俗を問うのかといった認識論的な検討が必要ではないのか、といった含意があった⁽³⁾。

1980年代の都市民俗学という問いかけは、全体として、その営みが、民俗学全体の再編の鍵となる、ならざるを得ない、という見通しに欠けていたといえるかもしれない。それは都市という問いを立てることの可能性を十分に分節化していなかったということもできよう。そうした潮流がどのようにして生み出されたのか、さらに遡って考えてみよう。

②……………団地と江戸と—倉石忠彦と宮田登

こうした具体的な実態としての都市民俗をとらえることが先行しながら、あるいはそうした志向が先行し過ぎたために都市民俗学は拡散したのとなってしまう。そうした潮流の根源にあるのは 1970年代から 80年代の早い時期に都市民俗学を力強く主張した倉石忠彦、宮田登の研究である。次にそれらを取り上げてその視点を確認してみたい。

まず倉石忠彦の研究を見よう。倉石は1973年に「団地アパートの民俗」[倉石1973]を発表し、「団地アパートの生活は民俗学の対象になり得るか」[倉石1973:32]という視点で団地生活を概観した。そこでは、概観・組織・行動・生活（住居・衣類・食生活・信仰・人の一生・年中行事・子供の遊び）に分けて記述がなされている。都市社会学との違いはつけにくいとしながらも、生活の諸記述においてその詳細さは大いに評価されるべきであった。団地の自治会組織とそこでおこなわれる住民の行動をおさえた上で、団地における生活をとらえようとしている。そこでは屋内の家具・調度の配置の見取り図、家族の所有する衣類一覧、食器一覧、育児用品一覧といった一覧表[倉石1973:36-37, 40-41]が提示され、具体的な生活誌が提出されていることが目をひく。考現学的手法で、団地アパート内に展開する生活をとらえ、客体化しようとした試みとすることができるだろう。結論として団地アパートの民俗は、伝統的なものとそうでないものとの間で団地社会の中で新しい生活を形成していこうとしているもの、であると述べている[倉石1973:42]。これが当時の民俗研究において新たな対象を見出したものとして注目を浴びた。

倉石は、これからさらに抽象度を増した論考「都市民俗学の方法」[倉石1974]を1974年に発表し（のち『都市民俗学序説』[倉石1990]に「都市への視線」として関連論考とともに改題収録）、そこで「その研究方法は従来おこなってきた民俗学的方法と根本的には異なるものではない」[倉石1974:9]と述べてはいるものの、「対象が類別化され、比較がさらに個別化されるだけである」[同前]というように、村落における共同性や集団性を前提とした民俗学的な視点と比すならば、実はかなりの変更が行われていた。民俗学としての連続性や可能性を論じようとするための配慮、あるいは強調であったかとも思われる。従来の視点や方法との共通性を強調するよりも、少なくとも類別化や比較の個別化の必然性を重くとらえるべきではなかったか、と思われる。

こうした倉石の論考を高く評価し、「都市民俗学の方法」の執筆を慫慂したのが宮田登であった。⁽⁴⁾次にその宮田の都市民俗研究がいかなるもので、どのような特徴を持っていたか、振り返っておこう。宮田の『都市民俗論の課題』[宮田1982]は、早い時期に都市民俗を掲げた書物として注目すべきものであるが、「都市民俗論」であって「都市民俗学」と表題に名乗らなかった点で、一面の躊躇あるいは留保を感じさせるものであった。これは第Ⅰ部が「都市民俗学への道」、第Ⅱ部が「都市の心意」と部立てがなされており、合計22編の論文が集成されている。第Ⅰ部の8編は、試行錯誤としかいいようのない都市民俗研究の可能性を繰り返し論じる試論であり、そこでは先に掲げた柳田國男や倉石忠彦の他に、千葉徳爾、岩本通弥といった人びとの研究を都市民俗研究の先駆として紹介し、あるいは都市人類学や都市社会学の研究動向を参照するなかで、都市民俗学の成立の可能性を述べている。ところが第Ⅱ部では一変して、江戸東京の民間信仰（七不思議、祀り棄て、厄除けなど）が取り上げられ、さらに口承文芸（昔話、世間話）などが論じられていく。都市空間の中の奇譚珍譚を次々と紹介し、それらが息づく生活空間としての都市を論じるのである。第Ⅰ部の都市民俗学の理論的な枠組みとは全く別に、近世初期以来の歴史を持つ大都市、江戸東京の具体的な民俗を論じることで都市民俗の内容を説明しているのである。そしてこの第Ⅰ部と第Ⅱ部との乖離は解消されることなく、やがて記号論を援用した後者の作業が宮田の都市民俗研究の中心になっていく。

この事情については宮田の没後すぐに重信幸彦が「未発の〈都市〉へ—宮田登の〈都市〉」[重信2000]で周到に論じているように、江戸を都市といささか強引に読み替えることによって都市民俗研究の

内容を充実させていったことを確認しておくべきだろう。いくつかの自治体史（佐野市、成田市、古河市、大田区など）の調査・編纂事業を通して新たな資料の発見があったものの、宮田の都市民俗研究とは江戸の民俗を論じるものであったといつてよい。もちろん、そこには歴史学との対峙や、都市民の「心意」という問いの設定によって他の学問が見いだせない—あるいは取り上げない—事象を捕捉し、検討の対象にしてきた功績を見いだすことはできる。しかし、そうした一連の江戸研究から都市一般を対象とする方法の回顧や整備、体系化は決して図られなかった。それよりも都市民の「心意」が逆にさまざまな民俗を生み出しているのだとする円環的な説明が繰り返されつつ、徐々に妖怪や女性、世紀末といった話題に移行していったのが宮田登の都市民俗論であった。つまり宮田にとっての都市民俗研究はあくまでも過程に過ぎず、目標ではなかったのである。

③……………世間話と芸能と—都市民俗学の隠れた達成

こうした理論も方法も整備せずに、いわばなし崩しに対象を取り込んでいってしまうという態度—別の水準の「方法」ではあろう—が民俗を研究する営みの特徴かもしれない。そうした視点で考えると都市民俗学という問いかけは、実にさまざまな要素や事象を取り上げていこうとする際のスローガンであったともいえるだろう。都市民俗学とほぼ同じような含意で用いられたのは、例えば「民俗の変化」であり、あるいは「現代の民俗」、もしくは「民俗の近代化」等々であった。

そうした都市民俗学の可能性、転位、読み替えは、例えば先にふれた大月隆寛の1985年の論考の結論近いところに図示されている[大月1985:92]が、当時これがそのまま平明な研究の見取図としては受け取られなかった。そうでなければ、『都市民俗学へのいざない』のような書物は生まれまいだろう。研究上の枠組みとしての都市民俗学とその可能性は明瞭に意識されず、宮田の作業を別の角度から追跡するような対象が浮上していった。それが世間話、とりわけ学校におけるものである。

常光徹の「学校の世間話—中学生の妖怪伝承にみる異界的空間—」[常光1986]はいわゆる「学校の怪談」として広く世に受け入れられていく資料群の最初の発見であった。副題から読み取れるように、妖怪、異界、空間といった都市民俗学と共通する鍵概念によって、古老ではなく中学校の生徒たちの生活のなかに流通している伝承を対象化したのであった。しかし、常光や追隨する研究者は「学校」という施設（組織）に「世間話」という伝承が宿るということを、学校の社会史や世間話という概念の越境性もしくは流動性との関連で問うことについてそれほど注意を払わなかった。

常光のこの作業は身近な伝承の発見であり、現代日常生活のなかで、新しいフィールドの登録であったが、それを都市民俗学のジャンルとして理解することは行われなかったといえるだろう。こうした新しい領域としての世間話の浮上は、都市民俗学の可能性を示していたが、そこから立ち戻って改めて都市民俗学の枠組みの吟味や理論構築が試みられることはなかったのである。

また、アメリカの都市伝説／現代伝説の研究としてJ.H.ブルンヴァンの『消えるヒッチハイカー』が1988年に大月隆寛、重信幸彦らによって翻訳・紹介された[J.H.ブルンヴァン1988]。この翻訳は力のこもったものだった⁽⁵⁾。単なる外国の民俗研究の翻訳というよりも、現代社会をとらえようとした大きな寄与だったが、民俗学からすれば辺境の「口承文芸」のさらに周辺のジャンルである「世間話」にそれほどの深い意味が読み込まれることはなかったのである。当時の口承文芸におけ

る話題は世間話と伝説との近似性や世間話の分類が中心で、なかには昔話が聞けなくなったから、仕方なく対象を広げ、断片的な世間話を扱うという位置づけさえもあった。あるいは世間話自体が包含する世界の豊饒さに幻惑されて、都市研究との関連を理論的に問い返すことはほとんどといってよいほど行われなかったのである。⁽⁶⁾

なぜならば、当時の日本の民俗学にとって中核は社会伝承であり、理論体系はそこから生み出されるものであるという思い込みが研究者のなかにあったのではないかと指摘しておこう。これは単なる回顧、懐旧談ではなく、それほど戦後の民俗学にとって社会伝承が果たした役割は大きかったのであり、ムラ＝伝承母体論は強烈な影響力を持っていたのである。口承文芸は民俗学のなかで特異で珍奇な領域であり、せいぜい文学研究者が密かに参入してくる際の裏口という扱いだっただけである。しかし、そこには実は都市を生み出す近代的なシステムや民俗の変化・変容といった問題をとらえる可能性が埋め込まれていたことを指摘しておきたい。

同じような肉縁的な領域として民俗芸能研究がある。世間話研究が興隆していくのにやや遅れて1990年から91年にかけて「民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会」（通称「第一」）が橋本裕之を中心として猛烈な研究会活動を展開した。その成果としては『課題としての民俗芸能研究』（1993年、ひつじ書房）が刊行されている。⁽⁷⁾

この書物は「民俗芸能研究の思想史」「解釈学と民俗芸能研究」「場の民俗芸能研究」「民俗芸能研究における現在」という4部構成となっている。ここでの解釈学は哲学的な概念というよりも儀礼や芸能といった身体所作とその解釈を扱う人類学的な視点と中世日本の注釈研究の参照とが混在したものであった。そして残りの思想史、場、現在という鍵概念が4年前の『都市民俗学へのいざない』と異なり、かなり意識的・戦略的に設定されていて、当時の人類学、国文学の研究の最前線をふまえつつ、民俗芸能研究を再編しようとする強固な意志を感じることができる論集であった。

そして何より重要なのはこの研究会、もしくは論集の主題がもはや都市ではなかった、ということである。さらに民俗芸能研究の再編にとどまらず、民俗研究の再編—思想史的な自覚、隣接諸科学への目配り、「場」および「現在」という問題意識によって一が可能であるということが示されていたことも無視できない。都市という命題をことさら押し出さなくとも、民俗芸能大会やストリップ、浅草などを主題とすることが可能だったのである。

口承文芸および民俗芸能という領域からの研究が、都市民俗学の内実を説得力と魅力に満ちたかたちで展開していくことになったのはなぜだろうか。このことは伝承母体論自体の正当性や普遍性、あるいは妥当性を問わなくても、また、都市における伝承母体を定位しようとする営みがなくとも、都市民俗を主題化することは可能だったことを示している。伝承母体論を通過しなくても都市、あるいは民俗の近代化、現代における民俗、民俗の変転を問うことは可能なのであった。都市民俗学において伝承母体論は足枷でしかなかった、と言いきっておきたい。民俗学である以上、伝承を支える地域を見出す作業が不可欠である筈だ、といった強迫観念が都市民俗学に内包された民俗研究革新の芽を枯れさせたのである。

そこには農村を対象として体系化されてきた民俗学の枠組みを無批判に都市（的なもの）に当てはめようとした失敗が刻みこまれている。それとともに口承文芸や民俗芸能—これらを民俗ではないとは誰も言わないだろう—は、そうした伝承母体を、少なくともムラを、前提としたり、必要不

可欠な基盤とするものではないことに思い至る。都市民俗学の成功はこうしたジャンルにおいて必然でもあったのである。

④……………都市をどのようにとらえるか—「個人」をめぐる問題

都市民俗学と、ことさらに標榜しなくとも都市を視野に入れた民俗研究を振り返ってみると、村落を絶対の前提としない立場からは、早くから都市民俗に接続しうる問いが既になされていたことに気づかされる。例えば桜田勝徳は「生活共同体の結束の強い村の人が村の中にいる時のことは、(中略) 今日まで細かく調べられてきたが、その村の人が村を離れて旅に出た場合には、村の拘束力から解放されて、たとえば旅の恥はかき捨てといった行動に出ることが、近年まで続いたし、(中略) つまり村の中の生活やその仕組をいくら精細に調べてみても、村を出た場合の村人の日本人らしさを追跡することはできないのである」[桜田 1976: 227] と述べている。

それを継いで千葉徳爾も「これまでの日本の大多数の平凡な人々が、歴史が始まってこのかたつい最近まで狭い自分たちのムラに閉じこもり、そのムラ限りの風俗習慣、いま私どもが民俗という名をつけてこの学会(日本民俗学会のこと—引用者注)の研究対象としているものを守り育てて来たように予想しているのは、果して本当のことなのだろうか」「つまり多くの民俗学の研究が、ほとんど全てムラを調査単位とし、そのムラの中で生活が一つのまとまりをもち、それ自体で独立した民俗をつくっているという前提をもって調査研究してきたことは、民俗学を研究する上で果して最も適切な方法なのだろうかということでもあります」[千葉 1985: 229-230] と述べている。こうした発言は都市とそこにおける生活を対象として意識していると考えるべきで、そこにはムラを必須の枠組みや単位とはしない民俗の存在の確認が行われている。このことは民俗芸能や口承文芸といったジャンルの性質とも共通する。どちらのジャンルも究極は個人の言葉や身体を通して表出するものだからである。

都市民俗学において個人を対象化すべきであるという問題意識は、比較的早い時期から希望として語られてはいた。岩本通弥は「現代社会における「常民」は、「集団」「組織」または「イエ」といったレベルはいうまでもなく、さらに個人の単位でも捉える必要がある」[岩本 1977a: 48] とか「民俗学がいう「ムラ」のように「民俗」によって役割行動が明確に規定されている社会では、個人の人格的内的表出による情緒的行動はほとんど潜在化して、すべて社会的規範に則るかもしれない。しかし、都市はこのような社会的規制が弱く、人間が個々人の意志・判断で行動することが多い異質な社会なのである。「民俗」だけを追究することによって都市の人間を理解することはできない。」[岩本 1977b: 27] と早くから主張し、人類学のライフヒストリー研究との接合を図っていた。こうした認識のもとに家族(=社会伝承)研究から都市を問おうとしたのが岩本の研究の特色であっただろう。

このことをより深く考えるには民俗学だけではなく、社会学や人類学における個人を対象とした研究も参照すべきであろう。ごく大まかに、例えばライフヒストリー研究には都市における生活をとらえるヒントを見出すことは十分に可能である。佐藤健二はライフヒストリー研究の根源的な可能性として、個人というフィールドの自覚化を挙げ、個人が例えば村と同じようなフィールドに他

ならないことを指摘している〔佐藤 1995:20-21〕。この考え方を敷衍すれば、村落と対置するようなかたちでの都市というフィールドの設定ではなく、多様な関係性に着目し、生活をとらえる場合の結節点あるいは核として個人をとらえ、そこから都市という「場」やそこにおける生き方をとらえることが可能になっていくであろう⁽⁸⁾。また人類学におけるライフヒストリー研究のなかでも Person 概念を中心とする前山隆の議論—のちに〔前山 2003〕にまとめられた—には、より注意をはらうべきであったと筆者は考えている。文化や社会を実現するのが個人であり、それでいて代替不可能な個性を持つという発想は魅力的であり、個人への着目やそこから得られる口述の対象化にとって示唆的でもある。

そうした社会学や人類学への問題系の広がり、共有の可能性を意識しつつ、筆者は日本における個人を単位とした民俗研究は昔話の語り手や職人、宗教者などを取り上げたものがあり、フィールドワークの現場では、ムラや家族そのものと対峙するわけではない、という認識とその登録の必要性とを主張してきた。「言語・伝承・歴史—日本民俗学の個人認識—」〔小池 1989b〕では、昔話の語り手という個人に焦点を据えた研究とライフヒストリー研究との接続の可能性を述べてみたし、同じく 1989 年に書いた「民俗研究の認識論」では、民俗研究の資料調査の場について「調査の場で直面するのは、社会や集団ではない。たった一人、もしくは複数の人間と向きあい、「ことば」を媒介に、生活様式を表現してもらうことである。」「現実に「調査」なる行為の場にあるのは「ことば」なのである。いいかえれば、民具の用法も、社会組織も、先祖をめぐる概念も、祭礼も全て「ことば」によって顕れるのである。」〔小池 1993:61〕と述べている。個人に対する注目は都市に限らず民俗研究全体を蔽うものであり、またそこまで認識を広げていくことが都市民俗学の議論を経ることで得られた重要な意義なのである。

冒頭で都市は人びとの移動の軌跡が蓄積されていく空間である、と述べた。その場合の人びとも決してムラにおける集団を把握するようにとらえることができるものではない。それぞれの事情や思惑、必然性がある人は都市に集まり、空間を形成する。その場合の空間は狭い意味での地理的な限定を意味しない。そのことを周辺地域との交流、さらに都市祭礼としての祇園山笠を核として具体的に検討したのが福間裕爾の「壱岐島の娘の手紙—都会を記すために—」〔福間 2008〕である。ここで福間は博多という都会を「周辺との密接な交流関係のなかで、行政区域を越えて、多大な影響を与えてきている」〔福間 2008:61〕と定位し、そこで人の生きる技法を追究している。具体的には人と人との邂逅のあり方や社交での演技的技法、集団内での振る舞いなどに着目し、そうした心得が博多という都会を再生産させていくことになっていると看破する。個人を具体的に析出するわけではないが、個人の営みの都市的な枠組みを描こうとした野心的な試みということが出来る。ここに都市民俗研究の新たな可能性を見出すことができるだろう。

こうした個人の対象化から理解が可能かと思われる都市民俗学のさらなる特色は文学テキストの積極的な採用である。かつての『都市民俗学へのいざない』の諸編や宮田登の諸論考でも、都市を舞台とした小説作品が分析対象として取り上げられる場合が少なくない。そこには例えば前田愛に代表される都市の記号論による解説〔前田 1982〕の影響を見てとることができるかもしれない。しかし、ここで考えてきたような個人をどういった視点で対象化するかという試行の一環としてとらえることも可能だろう。個人の内面、感情や意識のレベルで都市とその生活をとらえる模索として

文学研究との接合が試みられたのである。ただし、文学を民俗研究に取り込むという方法は、文学テキストの対象化という以前に、まず文字テキストとの向き合い方を整備しなければならない筈である。しかし、そうした体系的あるいは原理的な問いはこれまでのところ立てられてはいないように思われる。

都市を文学テキストとの関わり合いで考える方向性は、あるいは「物語」という視座が実際的なものかもしれない。競馬の厩舎をめぐる「ことば」や関係性を描いた都市民俗誌（と受け止めたい）である大月隆寛の『厩舎物語』[大月 1999] や、移動性の強い漁民の権威の源とされた巻物をめぐる「歴史」を描いた小川徹太郎の「浮鯛抄」物語」[小川 2006] などが想起される。「ことば」を連ねて「物語」へとまとまっていく、そのなかに都市をはじめとする個人の生き方の場が把握され、描かれていくといえるのかもしれない。

おわりに—都市民俗学の行方

都市民俗学はどこへいったのか—。最後に本稿の主題に立ちかえって、このことを考えてみると、既に答えは明瞭である。都市民俗学は現代社会や民俗変化を対象化するムラを超える民俗学へと民俗研究が発展的に解体する過程だった。従ってそこでの問いや模索された対象や概念化の取り組みは、現代における民俗的（と解される）諸事象との対峙へと分節化されたのである。その意味で都市民俗学という問題設定は歴史的なものとなってしまった。都市という枠組みでこうした現代の民俗的諸事象を取り上げる時期は過ぎ去ったのである。

もちろん、そうした研究の枠組みのスローガンとしての輝きが失われたからといって、都市民俗学という過程で発見された多くの問題や概念の有効性の検証が無意味なものとなったわけではない。「人の移動」という問題も民俗学史的にみるならば、都市民俗学を経なければ立ち上がることのなかったテーマであろう。ムラを離れ、移動していく人間をとらえることが民俗学で可能であるという見通しは、都市と都市民俗学とを読み替えることでもたらされたものに違いない。とするならば都市民俗学の軌跡を問うことも単なる回顧にはとどまらないと言えるのではないだろうか。

最後に個人的な回顧を付け加えておきたい。筆者は、都市民俗学が民俗学の希望であった時代に研究者を志望した。団地調査の経験もないわけではないが、口承文芸や民俗信仰—これらが実はムラを前提としない要素を持つことは先にも述べた—を軸に試行錯誤したために、関心はもちながらも直接に都市民俗を論じることはほとんどなかった。それよりも「民俗学が都市を扱うことは変化を対象化することだ」という塚本学⁽⁹⁾の示唆に衝撃を感じつつ、歴史民俗学の再生を模索しながら研究を続けた。民俗における個人の問題を意識した上で、文字文化を取り込むかたちで民俗研究に取り組んできた[小池 1996] のは、そうした過程を経てきたからである。だから、研究の方法として文字記録への対象の拡大というように問題を矮小化、単純化されると、もどかしさを覚える。問題は常に民俗あるいは伝承をどうとらえるかという根源的な認識にあったし、あり続けているのだが、都市民俗学の轍を再び踏む可能性は今でも存在しているようだ。もっともさまざまな誤解をおそれず都市とは文字である、と言いきることもいまだにできないのだが。

註

(1)——この点については[小池 2009]を参照されたい。
(2)——都鄙連続論を具体的な都市祭礼を事例に理論的な側面にまで目配りしたのが[福間 1992]である。参照されたい。
(3)——それは大変に舌足らずであり、一方で都市研究に限らず、民俗学全体を覆う問いでもあるのだが、その後、現在に至るまで十分に深めることができていないことは率直に認めなければならない。現時点で付け加えるとすれば、柳田以来の日本の民俗学の問いかけには歴史という補助線が強くひかれていたことを確認しておきたい。すなわち過去をどのように対象化するのか、といった意識が濃厚にあり、その点において民俗という事象を取り上げるという特異性が論じられるべきだと思われる。
(4)——このことは、筆者自身が生前の宮田から直接聞いたことである。
(5)——訳文そのものや付された大月による解説も優れたものだったが、忘れてはならないのは、翻訳にあたってつけられた脚注が、当時の日本の民俗学の現状をふまえた秀逸なものであったことである。なお、都市伝説の紹介とその射程については[重信 2013]を参照。
(6)——近年、ようやくそうした検討が行われている。渡部圭一による優れた成果[渡部 2013]を参照されたい。
(7)——筆者は精読する機会を与えられ、書評[小池 1997]を執筆した。以下、その際の認識をいささか進め

た記述を試みる。

(8)——なお、佐藤はさらに、口述の現在性、主体性、現場性を重視し、それらを記述することを通して新たな認識生産を生みだすことを論じている[佐藤 1995: 24-40]。このことを筆者は後述する都市とは文字である、という観点とつながっていくと考えている。方法論のレベルにおいて都市そのものを客観的に認識・記述できると考えるのではなく、記述や文字化のプロセス自体を意識的に対象化する過程で生活や生き方、あるいは構えとしての都市が抽出できるのではないかと、というのが現時点での見通しである。

また社会学における近年のライフヒストリー研究の可能性や生活史次元での移動の捕捉については有末賢[有末 2012]の視点も参照すべきであろう。ここでも都市という問いは背景になっているが、個人を媒介にさまざまな対象への接近が可能であるという姿勢には学ぶべき点がある。

なお、近年上梓された意欲的な論集である門田岳久・室井康成編『〈人〉と向きあう民俗学』[門田・室井編 2014]も個人という問いなくしては生まれ得ない研究であることをふまえると、個人という問いの可能性ははまだ汲み尽くされてはいないように思われる。

(9)——筆者の塚本への個人的問いかけに対する答え。1991年のことであったと記憶する。

参考・引用文献

- 有末 賢 2012 『生活史宣言—ライフヒストリーの社会学—』(慶應義塾大学出版会)
伊藤廣之 1985 「小島勝治の都市民俗論」『歴史手帖』13 (6) : 34-40
岩本通弥 1977a 「都市民俗学の予備的考察—東京大田区内での民俗調査を経験して—」『民俗学評論』16 : 37-55
——— 1977b 「都市における民衆生活誌序説—「サラリーマンの民俗学」の可能性—」『史誌』8 : 23-33
岩本通弥ほか編 1989 『都市民俗学へのいざない [I・混沌と生成 II・情念と宇宙]』(雄山閣出版)
上野和男 1978 「都市民俗学」上野ほか編『民俗研究ハンドブック』(吉川弘文館) : 257-263
大月隆寛 1985 『『都市民俗学』の本質的性格』『日本民俗学』157・158 : 81-103
——— 1999 『厩舎物語』(筑摩書房 [ちくま文庫])
小川徹太郎 2006 「『浮鯛抄』物語」『越境と抵抗—海のフィールドワーク再考—』(新評論) 226-262
門田岳久・室井康成編 2014 『〈人〉と向きあう民俗学』(森話社)
川村清志 2009 「都市民俗学からフォークロリズムへ」小池淳一編『民俗学的想像力』(せりか書房) : 60-83
倉石忠彦 1973 「団地アパートの民俗」『信濃』25 (8) : 31-42
——— 1974 「都市民俗学の方法」『季刊柳田國男研究』6 : 103-107
——— 1990 『都市民俗学序説』(雄山閣出版)
小池淳一 1989a 「書評『都市民俗学へのいざない』」『日本民俗学』180 : 127-139
——— 1989b 「言語・伝承・歴史—日本民俗学の個人認識—」『族』10 : 20-31
——— 1993 「民俗研究の認識論」『民俗学評論』29 : 57-67
-

-
- 1996「民俗書誌論」須藤健一編『フィールドワークを歩く—文科系研究者の知識と経験—』（嵯峨野書院）：125-132
- 1997「書評『課題としての民俗芸能研究』」『日本民俗学』214：113-119
- 2009「町・職人・統計—小島勝治論序説—」小池淳一編『民俗学的想像力』（せりか書房）：112-133
- 桜田勝徳 1976「『近代化』と民俗学」『桜田勝徳著作集（第5巻）民俗学の課題と方法』（名著出版）：221-247
- 佐藤健二 1995「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』（弘文堂）：13-41
- 重信幸彦 2000「未発の〈都市〉へ—宮田登の〈都市〉」『デジタル月刊百科』2000年4月号
- 2013「『都市伝説』という憂鬱」『口承文芸研究』36：103-113
- J.H. プルンヴァン（大月隆寛・重信幸彦・菅谷裕子訳） 1988『消えるヒッチハイカー—都市の想像力のアメリカ—』（新宿書房）
- 関 敬吾 1967「民俗学の現代的意義」『関敬吾著作集（第8巻）民俗学の方法』（同朋舎）：233-238
- 高桑守史 1979「都市民俗学—その研究動向と課題—」『日本民俗学』124：87-95
- 千葉徳爾 1985「ヒロシマに行く話—ムラびとの広域志向性—」『千葉徳爾著作選集①民俗学方法論の諸問題』（東京堂出版）：227-242
- 常光 徹 1986「学校の世間話—中学生の妖怪伝承にみる異界的空間—」『昔話伝説研究』12：12-34
- 福岡裕爾 1992「『都鄙連続論』の可能性—北部九州の山笠分布を中心に—」『福岡市博物館研究紀要』2：59-91
- 2008「壱岐島の娘の手紙—都会を記すために—」『市史研究ふくおか』3：61-94
- 前田 愛 1982『都市空間のなかの文学』（『前田愛著作集（第5巻）』筑摩書房）：3-377
- 前山 隆 2003『個人とエスニシティの文化人類学—理論を目指しながら—』（御茶の水書房）
- 宮田 登 1982『都市民俗論の課題』（未来社）
- 民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編 1993『課題としての民俗芸能研究』（ひつじ書房）
- 渡部圭一 2013「民俗学の一九八〇年代と『都市』概念」『口承文芸研究』36：126-138

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2014年9月29日受付，2015年1月26日審査終了）

Where Have Urban Folklore Studies Gone?

KOIKE Jun'ichi

Urban folklore studies attracted much attention in the 1970s and 1980s. How were the studies established? What possibilities and limitations did they have? In order to answer these questions, this paper analyzes the design and formulation stages of urban folklore studies to track their transitions. The analysis also covers the studies which did not clearly claim to be part of urban folklore studies but which actually examined urban folklore phenomena to verify such a possibility. This paper especially emphasizes that the verification should be based on whether the studies focused on small talks and individuals or not. On the whole, urban folklore studies are considered to have been a transitional form of folklore studies in the process of evolving from simple “village studies” to studies of modern society and folklore changes. The questions, subjects, and concepts dealt with by folklorists in the process indicated that folklore studies were developing as an independent discipline to explore folklore phenomena in modern times.

Key words: housing complex, Edo-Tokyo, urban-rural continuum theory, small talk, individual, modern times